

定期考査は必要か？

定期考査を廃止し、各教科・科目で単元ごとに実施する単元テストを導入する動きが徐々に全国の中学校や高校に広がりつつあります。

これまで多くの学校で欠かすことのできない評価方法として実施されてきた定期考査ですが、その意義・必要性を問うきっかけを学校現場にもたらしたと考えられるのが、高校では2022年度から実施された現行の学習指導要領です。それまでは定期考査などのペーパーテストで「知識・技能」を中心に測り、その結果が評定を算出する上で大きなウェイトを占める傾向がありました。しかし、現行の学習指導要領では、「知識・技能」以外の観点でも評価する観点別学習状況の評価の実施がこれまで以上に求められており、定期考査中心の学習評価のあり方に改善の余地があることが示されました。

本特集では、定期考査が抱える問題を整理しながら、その解決の糸口を、事例を通じて考えていくとともに、「定期考査は必要か？」という問いを探究してまいります。

VIEWnext編集部統括責任者 柏木 崇

P.4 事例1

再チャレンジ可能な単元テストによる評価で、
目標に向けて主体的に学ぶ意欲を育む
岩手県・私立専修大学北上高校

P.8 事例2

学習評価のあり方を見直す起爆剤として、
全県立高校で定期考査を廃止

奈良県教育委員会

実践例 ● 奈良県立^{かしはら}橿原高校

教師間の密な対話を通じて評価方法を毎年更新。
生徒の質問の質が上がり、欠点者が減少

実践例 ● 奈良県立商業高校

実技も評価に組み入れ、指導と評価の一体化を推進。
資格取得率向上にもつながる

P.15 事例3

単元テストと伝統の実力考査で高い目標の実現を支援
鹿児島県立鶴丸高校

P.19 事例整理

自校の定期考査の現状と課題についての整理が
議論の第一歩

P.20 インタビュー

「よいテスト」は、生徒と教師をつなぐ
学びのコミュニケーションツール

名古屋大学大学院教育発達科学研究科 教授 ^{ひでとき}石井秀宗

P.24 高校生座談会

私たちにとって「テスト」とは

高校教師の定期考査に対する考え

Q1 貴校について、次のようなことはあてはまりますか。

◎ 学校全体で、定期考査の回数を減らすことを検討している



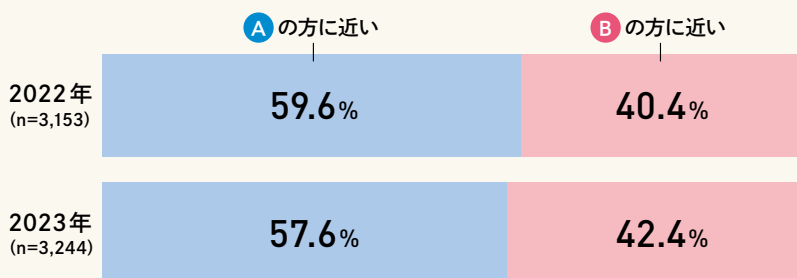
Q2 あなたが重視していると思う方はどちらですか。

A

指導改善や
成績評価のためには、
定期考査が欠かせない

B

指導改善や成績評価のためには、
定期考査がなくても、
単元テストがあればよい



※ Q1・2及びその結果は、ベネッセ教育総合研究所「学習指導調査 2022」「学習指導調査 2023」を基に編集部で作成。

現場の教師の声

定期考査は必要

- 複数の単元が範囲となる定期考査を実施することで、生徒の深い思考力を測ることができる。
- 定期考査で学習の量、質ともに少し高めハードルを設定し、乗り越えることが、生徒の成長には必要。
- 定期考査期間中や1週間前等は部活動等の活動の休止や活動時間の短縮があり、生徒の学習時間が確保される。
- 校内順位を知る重要な機会の1つ。
- 定期考査期間中はどの生徒も学習に没頭しやすい環境になる。

定期考査は不要

- 全校または学年で一斉に実施するため、出題範囲が単元の途中になることがあり、単元ごとの評価が行いにくい。
- 考査と考査の間の空きが長く、生徒の学習上のつまずきの発見や、理解度の確認の機会として不十分。
- 出題範囲が広く、生徒はいわゆる「一夜漬け」で乗り切り、考査後、学習した内容を忘れてしまうことがある。
- 考査前も含め、定期考査期間中は、部活動や探究学習等の諸活動を休止しなくてはならない。

定

定期考査を廃止している高校は現時点ではまだ少ない。だが、定期考査を廃止したり、実施回数を減らすことを検討している高校は着実に増えており(Q1)、また、「指導改善や成績評価のためには、定期考査がなくても単元テストがあればよい」と考える教師は40%を超えている(Q2)。「現場の教師の声」が示すように、定期考査の存続にも、定期考査の廃止に

も、それぞれ納得できる理由が存在する。観点別学習状況の評価の実施がこれまで以上に求められる中、学習評価において重要な役割を担ってきた

定期考査は、これからも必要なのだろうか。その答えは、どのような点を考えれば出るのだろうか。

先生方とともに
考えたい「問い」

自校では定期考査は必要なのだろうか。
その答えは、どのような点を考えれば出るのだろうか。

再チャレンジ可能な単元テストによる評価で、 目標に向けて主体的に学ぶ意欲を育む

岩手県・私立専修大学北上高校

岩手県・私立専修大学北上高校は、2023年度から普通科の一部の専攻で定期考査を廃止し、単元テストを軸にした単元ごとの評価を導入した。生徒が主体的に目標を設定し、学びの意欲を高められるように、単元テストの再受験を認め、その結果も総括的評価に組み込んでいる。再チャレンジが可能な単元ごとの評価は、教師や生徒にどのような変化をもたらしたのだろうか。

各教科・科目の到達目標と到達の時期を生徒が決める

専修大学北上高校は、2022年度から「未来を創る力」をキーワードとした普通科改革に取り組んできた。それまでの普通科を、探究学習やPBL（*1）を中心に学力の向上を図るディープラーニング（DL）コース（学問探究・PBLの2専攻）、福祉やビジネス、スポーツ科学などの専門分野を追究するアクティブラーニング（AL）コースの2コースに改編。コース・専攻の目的に応じたカリキュラムの開発とともに、新しいシラバス（学期シラバス）の作成にも取り組んだ。

新シラバスの特徴は、学習の到達目標を生徒自身が決める点にある。教科・

科目ごとに、基礎・標準・発展の3つのレベルを設け、それぞれ学期ごとのTODO、CAN-DOをシラバスに明記。

生徒は将来の志望や現状の学力に応じて、目指すレベルを自分で選ぶ。それは生徒がより主体的に学びに取り組むための工夫だ。そうした生徒の主体的な学びの実現を目指す改革の延長線上に、定期考査の廃止と単元テストを軸にした単元ごとの評価の導入が行われたと、川村俊彦副校長は説明する。

「各教科・科目の学習の到達目標を生徒が自分で決めるのであれば、目標に到達する時期も生徒に決めさせて、学びの見通しを持つ経験を積ませたい。そして、もし自分が設定した目標に到達しなかった時は、今の自分は何ができて、何ができていないのかを自

分で把握し、目標に到達するために何度でも挑戦できる仕組みをつくらうと考え、評価の改革に着手しました」

かつての同校における総括的評価の中心は、多くの学校と同様、定期考査で実施されるペーパーテストだった。定期考査は決められた時期に一斉に実施されるが、部活動で全国レベルの活躍をする生徒や探究学習などで校外での活動に取り組む生徒、テスト期間中に体調不良になった生徒などは、万全のコンディションでテストに臨めるとは限らない。また、例えば1学期に低い点数を取ってしまうと、その時の出題内容を2学期以降に努力して習得したとしても、評価の結果を変えることができないのが定期考査だ。

さらに、授業における単元間の切れ

目で定期考査が実施されるとは限らず、単元の途中で定期考査が行われることも多かった。そのため、各単元で育成を目指す資質・能力を丁寧に評価することが難しかった（図1）。

「大切なのは、生徒が確実に学力を身につけることであり、例えば1学期に学習した単元を2・3学期に理解することがあってもよいはず。本物の学力を身につけさせるためには、定期考査を区切りにして評価するのではなく、再チャレンジの機会を与えることが必要だと考えました」（川村副校長）

そこで同校では、23年度から普通科DLコースの学問探究専攻で定期考査を廃止し、各単元の学習後に行う単元テストを軸にした単元ごとの評価を導入。さらに、希望する生徒には単元テ

* 1 Problem Based Learning、または Project Based Learning の略。

学校概要
 設立 1951(昭和26)年
 形態 全日制／普通科・グローバルビジネス科・メカニクエンジニアリング科／共学
 生徒数 1学年約300人
 2023年度卒業生進路実績 国公立大は、岩手大、公立はこたて未来大、岩手県立大、東京都立大などに8人が合格。私立大は、専修大、日本大、早稲田大、神奈川大、立命館大などに延べ134人が合格。



今井智大
 キャリアセンター 副部長
 いまい・ともひろ
 同校に赴任して9年目。数学科。



野村学
 教務副部長
 のむら・まなぶ
 同校に赴任して21年目。国語科。



吉田俊哉
 キャリアセンター 部長
 よしだ・しゅんや
 同校に赴任して8年目。地理歴史・公民科(公民)。



川村俊彦
 副校長
 かわむら・しろう
 同校に赴任して3年目。理科(化学)。

図1 これまでの定期考査の課題(「化学基礎」を4学期制で学ぶ場合)

単元1				単元2								
物質の分類と分離	物質の三態	原子の構造	電子配置	イオンの形成	イオン結合	共有結合	金属結合	配位結合	周期的性質	元素の働き	分子間に働く力	結晶の性質
1学期の学習範囲＝定期考査範囲 40点								2学期の学習範囲＝定期考査範囲 60点				

課題1) 授業における単元間の切れ目で定期考査が行われるとは限らず、単元の途中で定期考査が行われることも多いため、各単元で育成を目指す資質・能力を丁寧に評価することが難しい。

課題2) 1学期の定期考査が40点だったとすると、その定期考査の範囲だった単元の理解度が2学期以降、40点以上になっても、1学期の定期考査の40点は変わらず、それが評定に反映されてしまう。

※学校資料を基に編集部で作成。

図2 再チャレンジが可能な、単元ごとの評価の仕組み

	1学期			2学期		
	単元1	単元2	単元3	単元4	単元5	単元6
知識・技能	10	20	20	10	10	10
思考・判断・表現	10	20	10	10	10	10
主体的に学習に取り組む態度	10	10	10	10	10	10
単元の素点 計	30	50	40	30	30	30
学期の評点	40			30		

再チャレンジ可能な単元テストで評価

	1学期			2学期		
	単元1	単元2	単元3	単元4	単元5	単元6
知識・技能	10 20(再)	20 30(再)	10 20(再)	単元テストの再チャレンジの実施方法や時期は各教科・科目によって異なり、学期を超えて複数回チャレンジできる教科・科目もある。		
思考・判断・表現	10 20(再)	20 40(再)	10 20(再)			
主体的に学習に取り組む態度	10	10	10			
単元の素点 計	30 50	50 80	40 50			
学期の評点	40 60					

※学校資料を基に編集部で作成。

ストの再チャレンジを認めることとした。23年度は2年次の学問探究専攻のみでの導入だったが、24年度からは1・2年次のDLコース全体に拡大した。

1学期の単元テストの成績が2学期以降の再挑戦で更新

評価の考え方は図2の通りだ。従来

は学期ごとに成績をつけて、最後にそれを足して学期数(同校は4学期制)で割り、総合的評価を行ってきた。当然、一度成績がついた学期の評価を変えることはできなかった。一方、新しい評価の考え方では、2学期は1・2学期の成績で、3学期は1〜3学期の成績で評価するというように、常に年度内のすべての単元が評価対象とな

る。そして、単元ごとの評価の材料となる単元テストの成績は、再チャレンジによって更新可能とした。

例えば、1学期に行った単元1の単元テストの結果が100点満点で40点であっても、2学期や3学期に再チャレンジして80点になれば、単元1は80点で評価される。

「私たちが育てたいのは、最初の結

果が40点だったとしても、60点、80点を目指して努力を続けることのできる生徒です。再チャレンジによって弱点を克服することができたのなら、それは真の学力が身についたということでしょうし、1年間で何ができるようになったか、何を身につけたかを正しく見取り、その結果を評定に反映させることが真の評価のあり方だと考えています」(川村副校長)

再チャレンジの方法・時期は教科・科目ごとに決定

単元テストの再チャレンジの実施方法やタイミングは、各教科・科目担当に任されている。川村副校長が担当する化学では、毎週火曜日を再チャレンジの日として、朝の「専北塾」(※2)の時間で単元テストの再チャレンジを行っている(写真)。生徒は、再チャレンジしたい単元を川村副校長に申し出て、川村副校長はその都度、新しいテストを用意して取り組ませている。数学の今井智大先生のクラスは、昼休みや放課後に単元テストの再チャレンジを受け付けている。既に8割近い点数が取れていても、よりよい成績を目指して再チャレンジを希望する生徒もいる。なお、今井先生は、単元テ

ストの得点が3割以下の生徒には、学力保障の観点から、再チャレンジを必須としている。

野村学先生が担当する国語では、単元テストの結果と単元末に課すレポート、そして「R80」(※3)を材料に、単元ごとの評価を行っている。単元テストでは主に知識・技能の観点で、単元末レポートでは主に思考・判断・表現の観点で評価する。単元末レポートのテーマは、単元で取り上げた素材文の内容が、他教科・科目や社会的なトピックなどどうつながっているのかを考えさせるものになっている。

「当初の単元末レポートは、単元で取り上げた素材文の内容を振り返るだけのものでした。ところが何人かの生徒が、学んだ内容だけでなく、ほかの教科・科目の内容との関連まで言及したレポートを書いてきたのです。教師の想定を超えて生徒は学びを広げられるのだと気づき、単元末レポートのテーマを変えることにしました。生徒の可能性を知ったことで、評価のあり方が改善されたのです」

生徒が持つ資質・能力の高さに気づいた野村先生は現在、単元テストで初見の素材文を使用することを検討している。

「汎用的な力を身につけさせるため

には、教科書に載っている素材文とは異なる素材文を使った単元テストを行い、単元の学習目標に到達しているかどうかを見る必要があります。それが実現できれば、大学入試にも対応できる学力を単元テストを通して育むことが可能になると考えています」(野村先生)

評価と学力について議論する中で不安が払拭

定期考査の廃止と単元テストの実施が決まった当初は、「定期考査がないと生徒が集中して勉強しなくなるのではないか」「頻繁に単元テストが実施されるようになると、生徒が単元テストの対策に追われ、疲弊するのではないか」といった不安を口にする教師も少なくなかった。そうした声に対して川村副校長は、定期考査が抱えている問題や、単元テストを軸にした単元ごとの評価の意義を説き、教師間の共通認識を図っていった。そして、単元テストの実施が始まってしばらくすると、生徒が日常的に学習する姿が見られるようになり、教師たちの考えは変わっていった。

キャリアセンター部長の吉田俊哉先生は、学校を変えなければならない



写真 3年生「化学」の単元テストに再チャレンジする生徒たち。

という思いを、教師たちが潜在的に持っていたと指摘する。

「少子化が進む中、学校の魅力を高めていかなければいけないという意識を、私たち教師も少なからず持っていたのだと思います。それが定期考査の廃止と単元テストの実施という変化を受け入れる素地になっていたのかもしれない。定期考査の廃止と単元テストの実施は22年度の生徒募集でもしっかり告知しており、生徒は改革が行われている前提で入学しているので、保護者などから定期考査の廃止に対する問い合わせはありませんでした」

定期考査の廃止や単元テストの実施

* 2 生徒が自分の学びたいこと、深めたいことを大切にして自ら選択し、専門性を高める放課後や長期休業中の学びの場。

* 3 接続詞で結ばれた2文構成かつ80文字以内で活動を振り返る。「R」は、リフレクション(振り返り)とリストラクチャー(再構築)のこと。茨城県立並木中等教育学校の中島博司元校長が考案。

が教師たちに受け入れられたのは、単元ごとに評価することの意義をしつかり伝えたことも大きかったと、川村副校長は振り返る。

「その場しのぎではない真の学力を生徒につけさせたいという思いは、どの教師も同じです。定期考査の廃止や単元テストの実施という手法論から入るのではなく、評価の目的や生徒に身につけさせたい学力を何よりも優先して伝えたいからこそ、教師間の共通認識が図れたのだと思います」

生徒一人ひとりに寄り添う 教科面談を充実させる

一つひとつの単元をどのように教えるのかを、教師がより深く考えるようになったことも成果の1つだ。

「単元ごとの評価を行うようになったことで、その単元を通して生徒にどのような力を身につけさせるのか、そのためにどんな学習に取り组ませ、どのように評価するのか、授業計画をこれまで以上に練り、見直しを持って各単元に入っていくようになりました」
（野村先生）

学期シラバスを基に単元シラバス（図3）を作成する教科・科目も出てきており、授業改善のスピードはさら

に上がっている。

また、単元ごとに丁寧に評価を行うようになったことで、生徒の資質・能力を見取る教師の力が高まっているように感じると、吉田先生は語る。

「単元ごとの評価を実施するようになってから、評価方法の引き出しが自分の中で増えていきます。私が担当する公民科では、単元テストだけでなく、パフォーマンステストを実施する機会を充実させたのですが、『この生徒はこんな深い洞察をするのか』などと驚かされることも増えました。定期考査で出していたような問題では見逃していた生徒の資質・能力を発見することができています」

今後の課題は、単元テストの再チャレンジの時間をいかに確保するかだ。再チャレンジは希望制のため、授業中に行うのは難しく、現状は朝の専北塾の時間や昼休み、放課後に行っている。生徒と教師双方の負荷を軽減するため、CLASS(*4)を活用したCBT(*5)形式での実施もいくつかの教科・科目で始まっている。

単元ごとの評価の実施を契機に、これまで以上に生徒一人ひとりと向き合っていきたいと、川村副校長は語る。

「単元テストを軸にした単元ごとの評価や単元テストの再チャレンジを実

施する目的は、生徒が自分で立てた目標を達成しようとする学びに向かうマインドを育成することにあります。目標と現状にギャップがある生徒を見逃すことなく、教科担当の教師が個別に面談

を行い、学習状況を生徒と一緒に検証して、学習方法の見直しや単元テストの再チャレンジを勧めるなど、生徒の主体的な学びを支えていきたいと考えています」

図3 単元シラバスの例（「化学基礎」）

R6 2年DL (学探・PBL)コース 化学基礎【化学結合】単元シラバス
専修大学北上高等学校 授業担当者 近藤健一

評価方法	評価基準
・演習プリント、小テスト、個別添削プリント、課題実験の取組達成状況	・知識・演習プリント・小テスト(知識分野)の取組状況 ・思考・演習プリント・小テスト(思考分野)の取組状況 ・主体・授業・実験の取組姿勢

時数	履修内容	授業内容
1	①イオン結合 イオンの生成	【講義】イオンの生成について 【演習】問題プリント配布・イオンの小テスト①
2	イオンの表し方 イオンのなりやすさ	【講義】イオン化E・電子親和力について 【演習】問題プリント配布・小テスト取組時間
3	組成式の表し方	【講義】組成式の表し方【演習】組成式の小テスト②
4	【課題実験】イオン・イオン結晶の性質	水溶性・電導性(塩化ナトリウムの融解時の通電)・機械的性質(岩盤の割断)の確認
5	②共有結合 分子の生成	【講義】分子の成り立ち【演習】分子の小テスト③
6	電子式・構造式	【講義】電子式の表し方【演習】問題プリント配布
7	結合の種類・配位結合	【講義】配位結合について【演習】問題プリント配布
8	分子の極性・実験説明	【講義】次回の実験の説明【演習】小テスト取組時間
9	【課題実験】分子の極性	四塩化炭素の性質確認 極性・無極性物質の相違点
10	実験のまとめ	【講義】実験の考察【演習】問題プリント配布
11	分子結晶・高分子化合物	【講義】分子結晶【演習】高吸水性樹脂
12	共有結合の結晶	【講義】性質の説明【演習】問題プリント配布
13	金属結晶	【講義】自由電子と金属結晶【演習】問題プリント配布
14	化学結合のまとめ	【講義】化学結合のまとめ【演習】小テスト④

【授業方針】
・講義時間は20分前後とし、授業の後半は演習時間として確保する。
・様々な生徒の理解度、取組具合に対応する教材を事前に準備する。
・生徒は小テスト、問題プリントを全て正答した状態を課題達成とする。
・小テストは個別で取り組むものとし、問題プリントは協同して取組可とする。
・演習時には、適宜状況監視を行い生徒の進捗状況を確認し、支援が必要な生徒には個別で対応する。
・演習の内容は、授業の内容の確認として問題プリントを取り組ませる。また必要に応じて小テストを実施する。
・問題プリントを終えた生徒には添削用プリントを配布し個別に添削を行う。

【授業内容のポジショニングマップ】

1つの単元をどのように展開・指導し、評価していくか、学びのストーリーを教師が描くために単元シラバスを活用したいと考えている。その際、進度やレベルだけでなく、講義中心か、生徒の活動中心かなど、学びのスタイルも意識する。今後、評価の観点や評価方法も単元シラバスに加え、単元シラバスを練り上げていく考えだ。

※学校資料を基に編集部で作成。

* 4 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。
* 5 Computer-Based Testing の略。コンピューター上で実施する試験。

学習評価のあり方を見直す起爆剤として、 全県立高校で定期考査を廃止

奈良県教育委員会

奈良県教育委員会は、2022年度入学生から全県立高校で定期考査を廃止した。そのねらいは、各校が自校の学習評価のあり方を見直し、観点別学習状況の評価を充実させることで、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を推進することにあった。学習評価の主軸である定期考査の廃止を各校はどう捉え、学習評価の方針や方法をどのように構築していったのか。県教委と普通科高校、商業高校に話を聞いた。

授業改善を促進するため、 評価方法を転換

奈良県教育委員会（以下、県教委）は、2021年度の2学期に、22年度入学生から定期考査を廃止することを、全県立高校に伝えた。学習評価において多くの学校が高い比重を置いている定期考査を廃止すれば、必然的に評価方法を見直すことになる。ひいては、授業をどう展開するかなどについて考えることに至るのではないか。そうしたねらいがあったと、高校教育課の辰巳理恵子課長補佐は語る。

「22年度入学生から実施された学習指導要領では、『主体的・対話的で深い学び』の視点からの授業改善が求められており、本県は各校がそれを実現

できるよう、教員研修などを通じて支援をしてきました。しかし、多面的・総合的な評価が浸透せず、授業改善はなかなか進まなかったのが実態でした。そこで、教師が自分の指導計画や評価観を見直すきっかけになると考え、定期考査の廃止を打ち出したのです」

その方針に、学校現場からは戸惑いや疑問の声が上がった。県教委が、校長や教務主任会、授業研究会などで繰り返し説明したのは、定期考査の廃止はあくまでも手段であり、指導と評価の一体化を図り、観点別学習状況の評価（以下、観点別評価）を充実させるために、授業のあり方を見直してほしいという点だった。そして、スクール・ポリシーに照らし合わせて指導計画を立て、3つの観点で生徒の学習状況を評

価することの重要性を伝えた。

また、評価方法を校内・教科内で議論した結果、複数の単元をまたいで評価することが適切なのであれば、各教科・科目で「総括テスト」を実施することは可能であり、総括テストを学年でまとめて実施する方がよいと判断するならば、それも1つの方法だと示した。ただし、テスト期間を設けても、それは従来の定期考査と位置づけが異なり、あくまでも「総括テスト」であること、テストの実施日にはテストだけでなく授業なども行うこととした。

「ペーパーテストだけでなく、多様な評価方法が取り入れられることで授業が変わっていくことを期待しました」（辰巳課長補佐）

さらに県教委は、各校に電子黒板や



高校教育課課長補佐
辰巳理恵子
たつみ・りえこ
県教委に赴任して7年目。



高校教育課教育改革推進係
係長
喜多教人
きた・のりひと
県教委に赴任して5年目。

奈良県概要（2023年度現在）
県立高校数 全百制28校、定時制4校、通信制2校
生徒数 約1万9000人
教員数 約1570人

Wi-FiなどのICT環境を整備。生徒がBYOD（*1）で1人1台端末を活用できるようにすることで、授業改善や学習評価の実践を後押しした。

*1 Bring Your Own Device の略。個人が所有するパソコン、タブレット、スマートフォンなどを、職場や学校に持ち込み、業務や学習に使用すること。

教師間で議論し、
試行錯誤を重ねる

23年度に県教委が調査を行ったところ、すべての県立高校で中間考査が廃止されていた。期末考査の時期に総括テストを実施する学校は多いものの、単元テストやパフォーマンス課題、発表など、多様な方法で学習評価が行われていることが分かった。高校教育課教育改革推進係の喜多教人係長は、どの学校も校内で議論を重ね、試行錯誤しながら学習評価を実施している様子が見られたと語る。

「22年度の実践を通じて把握した課題に23年度は取り組んだ」という話を多くの学校から聞きました。例えば、『単元テストを実施したところ、教師も生徒も負担が大きかったため、校内で話し合い、実施方法を見直した』といった声です。これまで教師は何事も個人で取り組む傾向がありました。各教科とも、教科内や学年内の教師間で議論した上で取り組みを進めていました。それは指導や評価の改善を図る上で大切なことであり、新たな方法での学習評価につながったと考えています」

県教委は今後、授業改善の延長線上にある探究学習の充実を支援していく考えだ。

実践例

奈良県立橿原高校

教師間の密な対話を通じて
評価方法を毎年更新。生徒の質問の
質が上がり、欠点者が減少

1年目は期末考査の期間に
総括テストを実施

奈良県立橿原高校は、奈良県の中に位置する地域の進学校だ。学習評価は、21年度まではおおむね定期考査7割、平常点3割の形で行われていたが、県教委の方針を受けて、教務部と教科主任会が連携し、新たな学習評価のあり方を検討した。

まずは教務部で原案を作成し、教科主任会で提案。各教科会で原案について検討した。そして、そこで出た意見を教科主任会で整理し、それを踏まえた修正案を教務部が作成して教科主任会で再び提案し、各教科会で修正案について検討した。1回の教科主任会ですら2〜3時間話し合ったこともあったという。そうした工程を繰り返した結果、22年度入学生からの学習評価は次の通りとした。

- ・ 定期考査は実施しない。
 - ・ 3つの観点別にA⁺A^BC⁺C⁺の5段階(24年度からは3段階)で評価。
 - ・ 1つの単元の学習状況を複数の材料で評価し、各学期末には各単元の評価結果を総括して、各学期の評価をつける。その際はA⁺A^BC⁺C⁺を数値化し、5段階の評定に総括する。
 - ・ 評価方法は、単元テストやパフォーマンス課題などとなるが、どのような方法で評価するかは、各教科・科目で決める。
 - ・ 単元テストなどは、各教科・科目の授業内で実施。実施時期や試験時間などは各教科・科目で決める。
- 22年度入学生の定期考査は廃止したが、22年度は2・3年生の期末考査の期間に総括テストを実施した。教務部長の上田裕史先生はこう説明する。
- 「定期考査をすべてやめることに、教師からは不安の声が上がりました。

	<p>校長 やまうち・ゆうじ 同校に赴任して1年目。</p>		<p>教務部長 うえだ・ひろふみ 同校に赴任して11年目。数学科。</p>		<p>教務部 にしだ・ゆうき 同校に赴任して4年目。地理歴史・公民科。</p>		<p>教務部 いしはら・しゅう 同校に赴任して3年目。数学科。情報科。</p>
--	--	--	---	--	---	--	---

学校概要

設立 1975 (昭和50) 年
形態 全日制/普通科/共学
生徒数 1学年約320人

2023年度卒業生進路実績 国公立大は、大阪教育大、奈良教育大、大阪公立大、奈良県立医科大などに15人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大、龍谷大、関西大、近畿大、関西学院大などに延べ652人が合格。

そこで総括テストを実施することになりましたが、あくまでも評価材料の1つの扱いとし、全体の中での比重を大きくしないことを徹底しました」

2年目に「糧高チャレンジ」を実施するも、3年目に再検討

22年度の実践を踏まえて、同年度末には23年度の学習評価のあり方が検討された。当時の校長と教務部で検討した結果、学期末の総括テストも廃止することを教科主任会に提案した。しかし、「まとまった範囲を出題することも大事ではないか」という声が上がった。

そこで教務部が提案したのが、「糧高チャレンジ」。それは、総括テストを22年度と同様に実施し、テスト後の1週間をテストの結果に応じた学習に取り組み「ブラッシュアップウィーク」とするもの。総括テストを生徒の学習改善に確実につながるための方策だった。それが教科主任会で了承され、23年度の6月・11月の行事予定に組み込まれた。6月、3日間にわたり、午前の3コマで総括テストを実施した。午後は通常授業だったが、生徒から「翌日のテストが気になって、午後の授業に集中できない」といった声が多数上がった。「総括テストはあくまで評価材料の1つですが、多くの生徒が定期考査と同じ重みで受け止めていました。そこで、11月の実施形態を見直すことにしました」(上田先生)

11月の糧高チャレンジは、総括テスト

トを11月中旬の7日間、各日1時間のみでの実施とし、翌週をブラッシュアップウィークとした。テストを希望しなかった地理歴史科などの3教科以外が実施したが、6月の時のような声は生徒から上がらなかった。

3学期の糧高チャレンジも11月と同じ実施形態としたが、テストを希望する教科がなく、実施しなかった。3学期は授業日が少なく、単元テストやパフォーマンス課題などで十分に評価できると各教科が判断したためだった。

23年度末には、24年度の糧高チャレンジの実施形態が検討された。実施時期は23年度と同じく6月と11月に設定。期間中は45分授業とし、それによって捻出した朝の30分間でテストを行い、翌週をブラッシュアップウィークとした。しかし、実施を検討するとした教科は、家庭科とリスニングテストを実施予定の英語科のみで、その他の教科は単元テストなどで評価できるという判断だった。

「リスニングテストはクラスごとに行うよりも、一斉に実施する方が音漏れなどで他のクラスに迷惑をかけないで済むと、英語科から希望がありました。1〜2科目であれば、実施期間を設けなくても、時間割の変更で対応が可能です。現在は(5月上旬の取材時

図1 教師から多く上がった意見と、教務部の対応

意見 「単元テストは学年で一斉に行わないため、問題が他のクラスに漏洩し、公平性に欠けるのではないか」

教務部 「学習評価は、生徒一人ひとりの学習目標の到達度を測るものであり、他者との比較ではなく、授業の内容を理解したかどうかを確認するために実施するものである」と、学習評価の趣旨を丁寧に説明。また、多面的評価のため、評価の機会が複数回あり、不正を犯す意味がないことも伝えた。そして、事前に問題を開示するなど、問題が漏洩したとしても評価に影響がない方法を示した。

意見 「単元ごとの短時間のテストで、大学入試に対応する力が身につくのか」

教務部 まず、「教科・科目の学習目標の到達度を測るためには、ペーパーテスト以外に、パフォーマンス課題やレポートなどが必要ではないか」と説明すると、それには賛同を得られた。そして、「大学入試に対応する学力も、授業で育むものではないか」と問いかけた。進路指導部と協議して、特別講座や模擬試験を増やすことで、試験慣れや解答テクニックの習得に対応するとして、理解を得た。

※取材を基に編集部で作成。

点 糧高チャレンジの実施の有無も含め、どのような実施形態にするか検討中です」(上田先生)

また、根強くあった「単元ごとのテストで大学入試に対応する力がつくのか」という意見に対しては、1・2年次の模擬試験の回数を増やすことにした(図1)。

担当教師間でこまめに話す中で、評価方法を軌道修正

定期考査の廃止を受けて、各教科・科目は、新たな評価方法をどのように構築していったのか。

地理歴史科の西田優輝先生は、以前から指導と評価の一体化を図るための評価方法を模索していた。その経験から、単元テストは大学入学共通テストと同じ出題形式とし、資料から読み取れることを文章の選択肢から選ぶ形を中心に出题(図2)。クフスによって選択肢の順序を変更するなど、正解の選択肢の番号を暗記しても意味がないようにしている。

「単元テストは、理解している点としていない点を確認するためのものだと、生徒に常々伝えていきます。糧高チャレンジでも、テストは30分間とし、残り15分間は解答を配布して、自己採点

図2 「歴史総合」の学習評価 概要

評価材料	単元テスト、授業プリント、パフォーマンス課題など
単元テスト	大学入学共通テストの出題形式を踏まえて、問題文の中で設定する場面は教師と生徒、生徒同士の会話などとし、解答は文章の選択肢から選ぶ問題を基本とする。
パフォーマンス課題	東欧や中東など、生徒になじみがない国を扱う場合、「先生が行きたいと思うようなスライドを作成する」といった課題を出す。
髙高チャレンジ	2023年度の1学期のみ実施。試験30分間、自己採点15分間とし、すぐに試験の結果を振り返られるようにした。

*取材を基に編集部で作成。

図3 数学科の学習評価 概要

評価材料	単元テスト、レポート、単元テストの再提出など
単元テスト	節末で行う演習問題を単元テストにしている。試験時間は20分間程度。基礎問題と応用問題の両方を出し、例えば5問中、基本問題が2問できたらC評価、応用問題ができればB評価、全問できたらA評価とする。返却後、解き直して再提出をした場合、「主体的に学習に取り組む態度」で加点。

*取材を基に編集部で作成。

と見直しの時間としました(西田先生)。「歴史総合」の担当教師は西田先生を含めて2人。西田先生が授業や課題の案を作成し、もう1人の担当教師と検討。評価規準もすり合わせている。「単元テスト以外にも、授業プリントやパフォーマンス課題など、評価材料は複数あるため、髙高チャレンジの2回目は実施しませんでした。定期考査を実施しない学習評価は初めての経験であり、計画通りに進むとは限りません。担当教師間でこまめに話して、微

調整しながら進めています(西田先生) 数学科では、単元テストやレポートなどを評価材料としている。試行錯誤の末、各節末にある演習問題を単元テストにすることにした(図3)。数学科の石原先生は次のように説明する。「定期考査の代わりにの評価材料を集めなければという思いから、単元テストの実施回数が多くなってしまうが、教師にも生徒にも負担が大きくなり、1年目にすぐに見直しました。元々、定期考査の問題は節末にある演習問題の

中から出していたので、それを評価材料にすることにしました。演習問題には普段はグループで取り組みませますが、単元テストの時は1人で解答させます。指導と評価が直結しますし、評価は3段階としているので、評価にさほど時間がかからないのもよい点です」以前は定期考査が評価の7割を占めていたため、提出物などを学年で統一しなくても問題にならなかったが、今は、科目の担当教師間で頻繁に打ち合わせをして、足並みをそろえている。「科目ごとに設けたリーダーが、担当教師に声をかけ、単元テストや評価規準などについて話し合うようにしています。単元テストの実施日が大幅にずれないように、授業進度の調整などもしています」(石原先生)

「こが分からない」と、具体的な質問をする生徒が増えましたし、継続的に学習している様子がうかがえます。ただ、それがつらいという生徒もいるため、そうした生徒への支援が課題です」また、課題がある生徒は単元ごとに支援するため、欠点となる生徒が大幅に減った。例えば数学科では、以前は各学期に10人程度、欠点となる生徒がいたが、今は1〜2人だ。保護者の新しい評価方法への理解も、少しずつ進んでいる。22年度入学時に学習評価の方針を説明した後も、面談などで度々単元テストの問題漏洩や生徒への負担感増などの懸念の声が上がった。その度に担任が、学習評価の趣旨や評価方法の工夫などを丁寧に説明し、理解を得るよう努めた。

主体的に学ぶ姿勢が身につく、授業後の質問がより具体的に

入学時から定期考査がなかった生徒は、今年度3年生となった。石原先生は、生徒に主体的に学ぶ姿勢が身につけてきていると感じている。

「以前は、定期考査の前に『対策プリントをください』と言い、一夜漬けで考査をしのぐ生徒が少なくありませんでした。今は、授業後に『この問題のこ

「一連の改革により、『生徒は定期考査があるから勉強する』といった生徒観が、教師の中で変化したと感じています。生徒は自身の理解度を把握して学習を工夫するようになり、教師の授業改善も進んでいます。今後も、指導と評価の一体化を図ることが現在の方向性を維持し、よりよい実践に向けて検討と工夫を重ねていきます」

実践例

奈良県立商業高校

実技も評価に組み入れ、 指導と評価の一体化を推進。 資格取得率向上にもつながる

中間考査期間に単元テストを 実施するも、2学期は廃止

奈良県立商業高校は、県立で唯一の単独の商業高校として21年度に開校した。前身の奈良県立奈良情報商業高校などから引き継いだ伝統の商業教育に強みがあり、日商簿記1級や公認会計士を始めとする難関資格に挑戦する生徒を支援し、合格者を出している。24年度からは、日本商業教育振興会「スーパー・アカウンティング・ハイスクール」の指定校となった。

同校では、県教委の方針を受けて、教務部主体で自校の学習評価のあり方を検討した。教務主任の高谷伸也先生は次のように語る。

「県教委が示した学習評価の方針は、22年度入学生から対象となるものでしたので、学校全体で改革意識を持ってたわけではありませんでした。管理職

と教務部が新しい学習評価の枠組みを作り、各教科に説明しました」

・1つの単元を2観点以上で評価。学期内で扱う単元を3つの観点で評価できるようにする。

・評価はABCの3段階。数値では表記しない。

・学期内で扱った単元の評価を、観点ごとに平均を出してその学期の評価とする。

・中間考査は廃止。総括テストは期末考査を実施していた時期に年3回実施。実施は各教科・科目の任意。総括の評価の材料として必要なのであれば実施できる。ただし、定期考査のように高い比重を置かない。

・単元テスト、総括テスト、パフォーマンス課題、実技、振り返りなど、複数の評価材料を使って評価する。

中間考査の廃止には戸惑いの声が教師から上がった。そこで22年度の1学

期は、2・3年生に中間考査を行う期間に、1年生には単元テストを全教科・科目で一斉に実施した。

「単元テストは午前を実施し、午後は学校行事としました。しかし、作問や授業進度の調整など、教師の負担が大きかったため、2学期からは単元テストを全教科・科目が一斉に実施することはやめました」（高谷先生）

あらゆる会議の場で繰り返し 観点別評価の意義を説明

新しい学習評価の枠組みを浸透させる上で徹底したのは、100点などの数値ではなく、ABCの3段階で評価することへの意識の転換だった。それまで1点刻みで評価していたため、教師から「3段階の評価で本当にいいのか」といった声が度々上がった。高谷先生はその都度、次のように説明した。

「観点別評価は、他の生徒と比べる評価指標ではありません。生徒の学習目標の到達度を見るものであるため、3段階の評価でよいことを伝えました。私自身、初めから観点別評価を受け入れられたわけではなかったのですが、先生方の不安に大いに共感し、機会がある度にそう説明しました」

会議の場で高谷先生から新しい学習



池田秀幸
教頭
いけだ・ひでゆき
同校に赴任して1年目。



高谷伸也
教務主任
たかたに・しんや
同校に赴任して6年目。商業科。



喜多純
商業科長
きた・じゅん
同校に赴任して23年目。商業科（簿記）。生徒指導部。

学校概要

設立 2021（令和3）年
形態 全日制／会計科、情報ビジネス科、経営ビジネス科、総合ビジネス科（*2）／共学
生徒数 1学年約200人
2023年度卒業生進路実績 私立大は、同志社大、龍谷大、追手門学院大、大阪経済法科大、大阪商業大、近畿大、四天王寺大、摂南大、阪南大、桃山学院大、帝塚山大、天理大、奈良学園大などに延べ56人が合格。短大・専門学校進学68人。就職37人。

評価の枠組みの説明があったことで、教師の意識が次第に変化していったと、商業科長の喜多純先生は語る。

「21年度から、校内研修や学習指導研究会などのテーマは学習評価一色でした。県教委から指導や助言を何度も受けるうちに、観点別評価についての

* 2 4つの学科は商業科としてのくくり募集。

理解を深め、不明点が解消されることで、新しい学習評価に挑戦しようという気持ちになっていきました」

同校の教師の半数を占める30代前半までの若手教師が、新しい学習評価に積極的に挑戦したことも追い風になった。例えば、「簿記」の授業は従来、問題を解くことが中心だったが、ある若手教師はパフォーマンス課題を作成し、生徒に取り組ませた。

1年目の実践を振り返り、評価規準を見直す

22年度が終わる頃、3段階での評価に関する課題が浮かび上がった。3段階での評価を総括した評定の平均値が、例年よりも低かったのだ。高谷先生は次のように説明する。

「私たちはB評価を100点満点の60点としてイメージし、B評価を基本に評価規準を作成していました。しかしそうすると、3つの観点が学習目標に到達してもBBBで、評定に総括すると5段階の3になります。学習目標に到達しているのに評定が3は低いと考え、23年度は評価と指導を総括的に再検討することにしました」

そして、生徒がA評価に到達できるよう、授業を改善したり、放課後に補

習をしたりして支援力を入れた。

23年度末には再び学習評価の枠組みを検討。24年度は期末考査を「総括テスト」に名称を改め、各学期の総括的なテストとして位置づけることも、テストの直前に扱った単元の単元テストを実施してもよいこととした。

「教務部で新しい学習評価の枠組みを作成し、先生方からの意見を基に修正を重ねてきましたが、評価方法については教科会に任せました。この2年半の経験から、教科・科目の担当者間で十分話し合って評価規準を明確にすることが、観点別評価を実施する上でも重要だと感じました」（高谷先生）

単元終了後すぐではなく、半月後に単元テストを実施

単元テストは、各教科・科目でどのような検討が行われ、実施されているのか。喜多先生が担当する「簿記」では、担当教師が1つの単元が終わる度に集まって、それまでの授業と学習評価の実践を振り返り、改善策を話し合った。「簿記」では、生徒が数多く問題を解いて、知識・技術を身につけるといふ授業が中心でしたが、思考力・判断力・表現力や主体的に学習に取り組む

態度はどうすれば育めるのか、どのように評価すればよいのかをみんなで話し合ってみると、様々なアイデアが出てきました。その中のいくつものアイデアが単元テストに採用されました（図4）

喜多先生は、適切な評価方法を探るため、23年度、3回の総括テストで、その学期で扱った各単元から1大問ずつ出題。①総括テストの評価を該当の学期の評価材料の1つとして組み入れる、②各大問の評価を該当の単元の評価材料に組み入れるという2パターンで評価を出した。すると、②の方が生

徒がどの単元でつまづいているのかを明確に把握できることが分かり、単元テストの意義に納得して推進できるようになった。

また、「簿記」の単元テストは、単元の終了時ではなく、単元が終了して半月後に実施している。

「22年度は、単元が終わるとすぐに単元テストを実施していました。正答率が非常に高いのはよかったです。ですが、日商簿記などの検定試験に向けては学んだことの定着が重要です。生徒が継続的に学習するよう、単元テストの実施時期をずらしました」（喜多先生）

高谷先生は担当科目の「情報処理」の単元テストで、オンラインアンケートツールを活用している。試験時間は10〜30分間。生徒がオンラインで解答を入力すると、自動的に採点して生徒に返却される。生徒はそれを見て、不正解だった問題を解き直す。また、自動集計機能によって表示される、クラス全体の平均点と設問ごとの正答率を基に、高谷先生はクラス全体で正答率が低かった問題を改めて解説するなどの指導をしている。

「テスト終了後すぐに正答率が表示されるため、ほかの生徒はできているのに、自分だけできていない問題があ

図4 「簿記」の単元テスト(例)

問 下記の売上帳と仕入帳に基づいて、各日付の取引を考え、仕訳を示しなさい。勘定科目は次の中から適当と思われるものを選ぶこと。[現金、売掛金、買掛金、売上、仕入] (問題には売上帳、仕入帳がつく)



喜多先生

完成された帳票を見て、どのような取引があったのかを考えさせる問題です。条件が提示され、それに沿って帳票を作成する問題はよく出していました。が、帳票を読み解く問題は初めて出しました。取引の本質を理解し、多面的な視点で売上帳や仕入帳を分析できる思考力を育めるのではないかと考えました。

ると、生徒はそれを強く意識します。つまり持っている点を把握しやすく、危機感が持てるからか、授業後に質問に来る生徒が増えました」（高谷先生）

地域と連携した活動や資格取得も進む

商業の科目でよく実施される実技の評価は、以前の評価方法では平常点として組み入れていたが、今は1つの評価材料として扱っている。授業で学んだ知識・技術を活用して取り組む課題も出しやすくなった（図5）。

そうした流れを受けて、23年度からは2年次の学校設定教科「実学」で、「県

商マルシェ」を開催している。それは、4つの学科から生徒が集まってチームを組み、各学科の学びを生かした役割分担をして企画や商品選び、仕入れ、値段設定など、すべて生徒のみで取り組む販売実習だ。地域住民が大勢訪れる、地域の一大イベントでもある。

池田秀幸教頭は、新しい学習評価によつてスクール・ミッションに掲げる『地域経済の発展に貢献・活躍できる商業人材の育成』に向けた活動が活発になっていると語る。

「地元企業と協働したおにぎりの商品開発や、地元商店街の空き店舗での商品販売など、生徒は地域と連携した様々な活動に取り組んでいます。そう

した活動を授業に組み入れて評価することで、生徒はさらに意欲的に取り組むようになっていきます」

学校教育目標の1つである資格取得の推進においても、新しい学習評価がプラスに働いていると、喜多先生は感じている。

「2週間の定期考査期間がなくなったことで、検定試験に向けた学習が中断されることなくできるようになった上に、単元テストで基礎が定着し、パフォーマンス課題で思考力が培われるなど、生徒は着実に力をつけています。実際、22年度入学生の日商簿記2級の取得率は、21年度入学生よりも高かったです（図6）」

早期の個別支援が可能になり、欠点者が大幅に減少

学習評価と授業が変わり、教師の指導も変わった。喜多先生も高谷先生も、単元テストによつて生徒がどこでつまづいているのが把握しやすくなったことで、個別支援に力を入れている。

「以前は、学期末に欠点の生徒に補習をしようとしても、どこでつまづいているのかを生徒は自覚できておらず、効果的な指導ができていたとは言えない状況でした。ばん回するのを諦めようとする生徒もいました。今は、単元ごとにつまづいている箇所を把握でき、早めの支援ができるため、授業に全くついてこられない生徒は、ごく少数で、欠点者が減りました」（高谷先生）

単元テストだけでなくできてよい成績はつかず、課題や実技などで多面的に評価することを生徒に重ねて説明すると、課題の未提出はほぼなくなった。

「生徒に日常的に学ぶ姿勢が定着しつつあり、放課後に生徒同士で学び合う姿がよく見られるようになりました。今後、生徒の成長を支える評価方法を模索し、地域経済を支える人材を育てていきたいと思えます」（池田教頭）

図5 「簿記」の課題（例）

課題 営業利益を最大化する経営戦略的な観点から、製品データを基に販売利益計画を立て、最適なセールスマックス（*3）を考えよう。

●製品データ

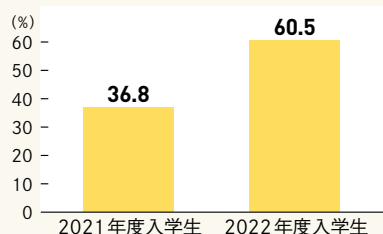
	ステーキ弁当	ハンバーグ弁当
販売価格	@ ¥1,200	@ ¥1,000
変動費	@ ¥840	@ ¥450
貢献利益	@ ¥360 (貢献利益率 0.3)	@ ¥550 (貢献利益率 0.55)
固定費	¥400,000	
販売総数	2,000食（1か月）	

損益分岐点や目標営業利益の計算だけではなく、制約がある中で最適なセールスマックスを考えるグループワークです。調理時間や優先して売りたい商品などを踏まえて考えさせました。

課題 コンビニエンスストアやスーパーマーケットにあるもので、会社の「費用」にあたるものは何か。

1年次の5月の連休中の課題として出しました。ある生徒は、「ウォーターサーバーは会社の『備品』だが、中の水は消費するものなので、『費用』にあたる」と解答しました。授業で学んだ知識を実践の中で捉えることで、本質の理解につながるのだと実感しました。

図6 日商簿記2級の取得率



2022年度入学生は現在3年生のため、今後も卒業までに取得者数はさらに増える見込み。
※学校資料を基に編集部で作成。

*3 製品の生産量と販売量の組み合わせのこと。

単元テストと伝統の実力考査で 高い目標の実現を支援 鹿児島県立鶴丸高校

鹿児島県立鶴丸高校は、開校以来4万6000人を超える人材を社会に送り出してきた全国屈指の進学校だ。同校では、学習指導要領で求められている観点別学習状況の評価（以下、観点別評価）の充実を実現するための手段の1つとして、すべての教科・科目で単元ごとの評価を実施し、定期考査を廃止することを決めた。2024年度からのその改革は、教師たちどのような思いと議論によって形づくられたのだろうか。

改革は観点別評価の議論から始まった

鹿児島県立鶴丸高校では、新学習指導要領の実施を受け、教育活動のさらなる充実を目指すため、2023年度、校長、教頭、そして各分掌・学年主任など、14人の教師から構成され、教育課程や教科指導のあり方、大学や研究機関などとの連携のあり方などを研究する「未来プロジェクト委員会」を発足させた。

未来プロジェクト委員会の議論のテーマは多岐に及んだが、23年度の議論において特に重要なテーマとなったのが、資質・能力を育む観点別評価のあり方だった。その議論は常に「鶴丸高校ではどのような生徒を育てるのか」

を出発点に行われたと、小島健志教頭は振り返る。

「鶴丸高校の3年間でどのような生徒を育てるのか。本校で学ぶ今の生徒の姿はどうか。学校を見守る県民は本校に何を求めているのか。14人のメンバーがそれぞれの考えや思いを語りました。忙しい中、貴重な時間を割いて集まるのだからこそ、評価方法などの各論から検討するのではなく、本質的なことから対話を始めました」

東京大学や京都大学、そして国公立大学医学部医学科など、最難関大学を進路目標に掲げて入学してくる生徒が多い同校では、志望校合格のための支援はこれからも変わらない重要な使命であるという点については、未来プロジェクト委員会のメンバー間で意見の



教頭
小島健志
こじま・けんし
同校に赴任して3年目。



教師
渡辺豊隆
わたなべ・とよたか
同校に赴任して2年目。

相違はなかった。しかし、日々の生徒の様子について語り合うと、「生徒は皆、すごく頑張っているけれども、多忙が原因で疲れている生徒がいるのも事実だ」「生徒は学校を信頼しているが、自分で学びの一步を踏み出す力の育成もこれからは重要だ」などと、課題も提示された。



進路指導課主任
蓮香尚矢
はるか・なおや
同校に赴任して10年目。地理歴史・公民科（世界史）。



進路指導課副主任
今門健作
いまかど・けんさく
同校に赴任して4年目。数学科。

学校概要

設立 1894（明治27）年
形態 全日制／普通科／共学
生徒数 1学年約320人
2023年度卒業生進路実績 国公立大は、東北大、東京工業大、東京大、一橋大、名古屋大、京都大、大阪大、神戸大、九州大、熊本大、鹿児島大などに165人が合格。私立大は、慶應義塾大、明治大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ130人が合格。

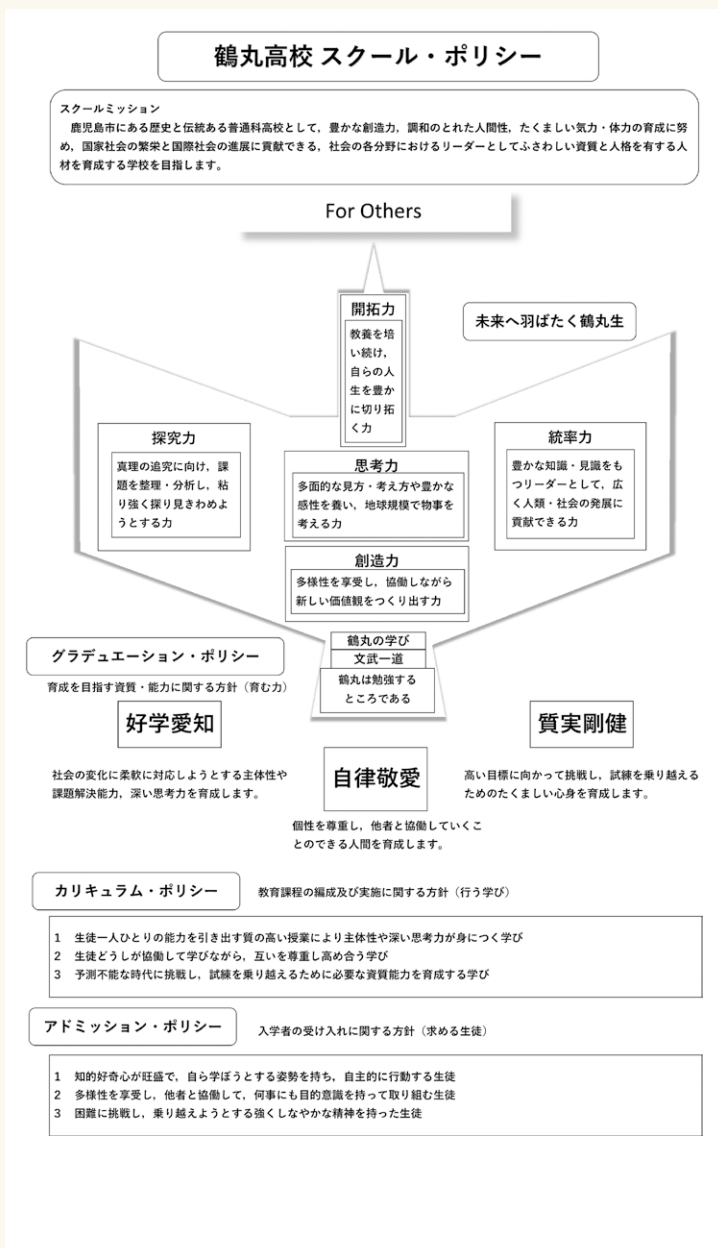
「私たちはスクール・ポリシー（図1）に立ち返りながら、開拓力、探究力、思考力、統率力、創造力の5つの資質・能力を育む教育活動の実現のためにどのような改革が必要か、議論を重ねました。その結果、23年度の夏には、学校行事全般を精選する機運が高まっています」（小島教頭）

スモールステップの意味を問い直す

23年度の秋には、未来プロジェクト委員会において、日常的に生徒が見通しを持って学習できる環境づくりと、指導と評価の一体化による学力の伸長及び進路目標の達成を目的として、単元や題材など、内容や時間のまとまりごとに評価の場面や方法をいかに充実させるか、議論のテーマが具体化していった。そして、ペーパーテストやレポート、発表など、多様な評価方法による単元テストの導入が相上り（せりあがり）に載せられた。

未来プロジェクト委員会のメンバーで進路指導課副主任の今門健作先生は、「生徒が自身の学習の到達度を単元ごとに確認し、その後の学習の進め方の改善に生かすことができる単元テストは、生徒の主體的な学び、そして

図1 鶴丸高校のスクール・ポリシー



※学校資料をそのまま掲載。

希望進路の実現に確かなつながる」と感じた。しかし、単元テストを用いたスモールステップによる評価を行うにつ、これまで同様に定期考査が実施されると、生徒の負担が増えてしまう。だからと言って定期考査の削減や廃止は、進学校での事例がまだ少ないこともあり、単元ごとの評価を行うことの大切さは理解できても、正直不安はあったと率直に語る。

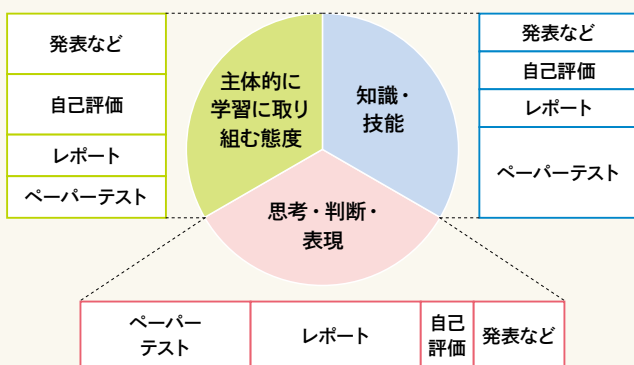
「それでも、最初から『できない』と否定するのではなく、どうすれば実現に近づけるのか、実行しながらよりよい形に変えていくことはできないかと、改善策や代案を挙げながら粘り強く考えるベテランの先生方の姿が印象的でした」（今門先生）

その後、未来プロジェクト委員会を中心に、定期考査を廃止した場合、定期考査期間に実施していた教員研修や

進路検討会などをどこで実施するのかといった懸案事項を、一つひとつ丁寧に議論していった。そして24年2月には、24年度から単元ごとの評価を充実させるとともに、定期考査を廃止することを生徒と保護者に発信した（図2）。渡辺豊隆教頭は、「定期考査の廃止は改革の方法に過ぎないことを丁寧に伝えた」と振り返る。

「単元テストによって、生徒はスモ

図2 生徒と保護者に伝えた評価の方法のイメージ図



※学校資料を基に編集部で作成。

図3 校内で実施する考査の変化

23年度	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	復習考査	実力考査(1年生・2年生)	前期中間考査	実力考査(1年生・2年生)	前期期末考査	実力考査(3年生)	実力考査(全学年)	実力考査(3年生)	後期中間考査	実力考査(1年生・2年生)	学年末考査	

24年度	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	実力考査(2年生・3年生)		実力考査(全学年)		実力考査(全学年)			実力考査(全学年)			実力考査(1年生・2年生)	

※学校資料を基に編集部で作成。

ールステップで自分の学習状況を把握することができ、その後の学習の進め方を改善するスパンが短くなること。ペーパーテストを含む多様な評価方法で単元テストを行うことで、一人ひとりの生徒の成長を丁寧に見取ることができ、支援すべき点が明確化しやすいこと。そのように、評価の機会が増え、その内容も充実するからこそ、定期考査の廃止に至ったのだと伝えました」「スモールステップ」という言葉の意味の伝わり方にも同校の教師たちは

気を配った。単元テストは定期考査に比べれば、狭い範囲を対象とした評価となる。しかし、学習の到達目標を下げないためには、スモールステップではあるが、出題内容のレベルは難関大学入試を目指すに値するものであることを、生徒と保護者に伝えたい。

その結果、生徒や保護者から、単元ごとの評価の充実に伴う定期考査の廃止について否定的な声が上がった。

新しい仕組みの中で改善を続けていく

24年度の同校の校内考査の実施内容は様変わりした(図3)。実力考査では校内偏差値や順位、度数分布を生徒に示すが、学習の到達度を確認する単元テストでは相对比较は行わない。どのような方法で観点別評価を行い、総合的評価が行われるのかを、生徒は各教科・科目が作成する単元シラバスで確認してから学習に取り組む。単元シ

ラバスには、全教科・科目共通の掲載項目があり、シラバス作成時にそれらの項目の記載漏れがないよう、チェックシートで確認している(P.18 図4)。単元テストの1日あたりの実施教科・科目数の上限などは教務課が中心となって検討しているが、生徒や教師の声に耳を傾けながら、自校に最も合ったスタイルに練り上げていく考えだ。

新しい環境への対応が求められる生徒の様子にも、教師たちは目を凝らしている。日々の学習で自走することができているか。その自走は希望進路の実現につながるものなのか。そうした点を教師が正確に判断するためにも、単元テストの精度が問われる。単元テストの内容の難易度が高すぎると、生徒は学習上の課題を自分で発見しにくくなる。単元シラバスでは、その単元の観点別の学習状況として、「おおむね満足できる」状況、つまり評価規準は明記されるが、その評価規準の設定を教師たちは重要視している。

「難関大学志望の多い本校の生徒に求める評価規準をきちんと設定することによって、単元の指導計画の焦点が絞られますし、単元テストの内容もおのずと見えてきます。単元シラバスと単元テストは、まさに授業改善と一体化したものです」(小島教頭)

単元テストでは校内順位など、相対的な成績が算出されることはないが、評価規程が確立された単元テストの結果を蓄積し、生徒が折に触れて参照できるようにすれば、その教科・科目における自身の伸びや課題を生徒が確認しやすくなるのではないかと、渡辺教頭は考える。

「生徒が単元テストの結果を記録し、振り返ることができるとシステムの構築を検討しています。今回のような大きな改革では、実践さえすれば終わりというわけではなく、工夫や改善を途切れさせないことが求められていると感じています」（渡辺教頭）

「私は本校に赴任して10年目ですが、その間に社会は大きく変化しました。しかし、社会の有り様は変わっても、

新しい一歩は 原点帰帰の一歩

全国屈指の進学校であるとともに、先駆的な改革を続ける鶴丸高校。未来プロジェクト委員会のメンバーだけでなく、全教師がこれからの自校のあり方について議論し、それぞれの考えを深めてきた。進路指導課主任の蓮香尚矢（はるか）先生は、「本校がこれまで追い求めてきた教育は、これからも不変の価値を持つていけることを議論の中で確認することができた」と語る。

「私は本校に赴任して10年目ですが、その間に社会は大きく変化しました。しかし、社会の有り様は変わっても、

図4 シラバス作成時のチェックシート

- 教科名の表示がある。
- 科目名の表示がある。
- 単位数が表示されている。
- 対象が明示されている。
- 使用教科書が明示されている。
- 副教材などが明示されている。
- 学習の目標が掲載してある。
- 学習内容が掲載してある。
- 学習計画（進度表）が掲載してある。
- 評価の観点に掲載してある。
- 評価規程（「おおむね満足できる」状況に到達した姿など）が掲載してある。
- 評価方法が掲載してある。

・生徒に示すことで、生徒が計画的、主体的に学習できるような構成である。
・学校のウェブサイトに掲載しても、学習内容や評価方法について保護者などから疑義を持たれず、説明を果たせる内容である。

※学校資料を基に編集部で作成。

鶴丸高校で育成を目指す生徒像は決して変わってはいないことを、スクール・ポリシーについて様々な先生方と話す中で気づきました。一方で、生徒の気質は変化しています。かつての本校の生徒は『人から言われなくても自ら学ぶことができる』と地域から評価されてきました。しかし、時代が進むにつれて、教師から『こうすればいいよ』と言われることを期待する生徒が増えてきたように思います。単元ごとの評価を通して自ら学習改善に取り組み生徒を育てることは、本校の原点帰帰の一歩なのかもしれません」

また、蓮香先生は、一連の議論を通じて、生徒の実力把握と教師の指導力向上という点での実力考査の重要性を実感したという。

「本校は実力考査の作問に力を入れており、例えば3年生の実力考査の問題は、教科団全員で約2か月かけて完成させています。その結果、実力考査の成績を基にした精緻な進路指導を実現することができています」（蓮香先生）

同校に赴任して4年目の今門先生は、「本校の教師は、実力考査の作問の場で先輩教師から作問に必要な視点を学び、指導力を高めてきた。その伝統も、希望進路を実現できる生徒を育

てたいという思いによって受け継がれてきた」と語る。

「今回の改革の目的が『多忙感』の解消だったとしたら、実力考査の実施回数も減らそうという声が出てきたかもしれません。そういった声が出なかったのは、改革の出発点が『どのような生徒を育てたいか』だったからであり、むしろ実力考査の重要性を皆が再認識したと思います」（今門先生）

渡辺教頭は、「大きな改革だったからこそ、先生方と熱い議論もあり、大切なことを確かめることもできた」と振り返る。

「議論の過程で一人ひとりの教師の考え方の違いも見えましたが、これまで通りでよいわけではないという向上心、そして生徒のためにもっとよい学校にしたいという思いは皆一緒であることを実感できたのは、何よりの成果でした」（渡辺教頭）

大きな可能性を持った生徒がそれぞれの力をより発揮できるような学校にバージョンアップするために、新しい一歩を踏み出した伝統校の教師たち。スクール・ポリシーに掲げる「開拓力、探究力、思考力、統率力、創造力」を、教師自身が発揮している。

事例整理

自校の定期考査の 現状と課題についての 整理が議論の第一歩

定期考査の廃止は「手段」に過ぎない

事例では、定期考査の廃止決定に至るまでの経緯と、廃止決定後の改革を紹介した。廃止の理由や、その決断を支えた教師の思い・考えは様々であったが、すべての事例に共通していたのは、定期考査の廃止は観点別学習状況の評価を充実させ、目標と指導と評価の一体化を図るための「手段」に過ぎないとしていた点だ。各校が目指したのは、生徒が自身の学習に見通しを持ち、主体的に取り組み続けることができる学校づくり、そして教師が授業改善を続けながら、学校として育成を目指す資質・能力を、各教科・単元を通して着実に育む学校づくりだった。

単元テストだ。事例では、単元テストの実施によって、生徒にどのような力を身につけさせたいのか、そのためにはどのような授業と評価を行うのかが議論され、見通しを持って各単元の授業を開始するようになったことや、単元ごとの評価を行うことで評価方法の引き出しが増え、それまでは見逃していた生徒の資質・能力を発見することができるようになったことなどが、現場の教師から語られた。

しかし、定期考査の廃止が目的ではない限り、定期考査そのものを改善することで、目標と指導と評価の一体化を図る選択肢もあるだろう。定期考査の問題の質や評価への生かし方を見直し、生徒が自身の学習状況を把握できるようにすることは、定期考査の存続・廃止の議論を待たずして取り組むべきことではないだろうか。定期考査は必要か、その答えは、各校における学校づくりの議論の先にある。

図 定期考査で生じやすい問題と、その解決の糸口

	定期考査の特徴	生じやすい問題	解決の糸口
評価の目的	総括的評価	定期考査の成績で評定が左右される	評定における定期考査の成績が占めるウェートを見直す
評価する資質・能力	主に知識・技能、思考力・判断力・表現力	ペーパーテストによる評価のため、知識・技能中心の評価となりやすい	定期考査以外の多様な評価方法を取り入れる
実施体制	全校または学年で一斉に実施	日々の学習の積み重ねではなく、一夜漬けの学習で臨む生徒が生まれやすい	単元テストなど、教科・科目ごとに高い頻度でテストを行うことで、日々の学習の積み重ねを促す
実施期間	3日～5日間程度 (実施前の一定期間は部活動などは停止)	授業だけでなく、部活動や探究学習などの校外学習、資格・検定試験対策が中断される	全校または学年で一斉に実施しないようにすることで、テスト期間を設けない
実施回数	年3～5回	考査間の空きが長く、生徒の学習上の問題点を発見しにくい。1回の考査の結果が評定を大きく左右し、成績の挽回が難しい	単元テストなど、高い頻度でテストを行うことで、学習上の問題点を見つけるとともに、その後のテストで挽回しやすくする
出題内容	授業で学習した内容 (複数の単元にまたがることも)	出題範囲が広いいため、生徒は復習し切れなかったり、受けっ放しになったりすることがある。単元の途中までが出題範囲となることがあり、単元ごとの評価が実現しづらいことも	単元テストやパフォーマンス課題などで、単元・題材等のまとまりごとに評価する
評価結果の利用方法 (生徒)	今後の学習改善	出題範囲が広いいため、生徒が自身の学習上の問題点を把握しづらく、学習改善に生かしくにくい	単元の指導計画やルーブリックを通じて学習目標を共有し、単元テストのようなスモールステップの評価を行うことで、生徒自身の学習状況の把握と学習改善を支援する
評価結果の利用方法 (教師)	今後の授業・指導改善	定期考査の結果が評定や校内順位を決めるためのものにとどまり、授業・指導改善の材料として生かされないことも	単元ごとの指導計画やルーブリックを作成し、授業とテストの目的をすり合わせ、テストの結果を授業・指導改善につなげる

※事例の内容も踏まえて編集部で作成。

「よいテスト」は、 生徒と教師をつなぐ

学びのコミュニケーションツール

名古屋大学大学院教育発達科学研究科 教授

石井秀宗
ひでとき

学校現場において、テストはなくてはならないものとして存在してきた。しかし、テストはどのように作られるべきか、「よいテスト」とはどのようなものかを考える機会は少なかったのではないだろうか。生徒の学習や進路に大きな影響を与えるテストのあり方について、テスト研究の専門家に聞いた。

「よいテスト」を作るための 要件を知ることが大切

日本テスト学会では、テストとは「能力、学力、性格、行動などの個人や集団の特性を測定するための用具であり、実施方法、採点手続、結果の利用法などが明確に定められているべきもの」と定義しています。ひと口にテストと言っても、何を測定するのか、どのように実施、採点するのか、その結果をどう利用するのかは様々です。

めには、目的、作成、実施、採点、運用など、様々な観点で検討することが必要です（P21図1）。担当教科・科目に関する高度な知識・技能ももちろん必要ですが、それだけでは、授業で育成した資質・能力を正確に測定し、結果を適切に解釈・運用できるテストは作ることができないのです。

学校で行われているテストには、次のような問題点が見られると言われます。まず、学習の目標に到達しているかどうかを評価するためのテストでありながら、平均点が非常に低くなって

いしい・ひでとき 東京大学大学院教育学研究科博士課程修了。大学入試センターやアメリカ・ミネソタ大学でテスト研究に取り組む。2015年より現職。研究領域は、教育測定学、計量心理学（心理統計学）、データ科学。研究テーマは、テスト開発、項目作成ガイドライン作成、データサイエンス教育、入試研究など。「不出来なテストをなくすこと、テストをより良質なものにすること」を目指し、解答データに基づいた問題分析や、問題作成に関する研究に取り組んでいる。

図1 「よいテスト」の要件

● 目的が明確であること

- テストで測りたい能力は何か
- その能力を測ることに意義はあるか
- 何を問えば、その能力を測定できるか
- 測るべき能力に含めるもの／含めないものは何か

● 適切に作成されていること

- 測るべきものが測れるようになっているか
- 受検者集団に合ったテストになっているか
- テスト仕様書・ブループリントを作成する (P.22 図3、図4)
- テスト問題作成ガイドラインを利用する
- 声に出して読んでみる
- 忘れた頃に見直す

● 適切に実施されていること

- 測るべき能力以外の要素が得点に影響していないか
- テストの目的や評価方法を受検者が理解しているか
- 受検者が適切な応答をしているか

● 正しく採点されていること

- 採点基準が合理的なものになっているか
- 正答、誤答の根拠が明確に示されているか
- 採点者が採点基準を理解しているか
- 採点基準に従って採点されているか

● 適切に運用されていること

- 結果は理にかなったものになっているか
- 公平公正な解釈、運用をしているか
- テストの目的は達成されているか
- 拡大解釈、過度な一般化、目的外利用をしていないか

※石井教授の提供資料を基に編集部で作成。

しまっているケースです。平均点が低すぎると、生徒一人ひとりが目標に対してどこまで到達しているのか、目標までの距離はどのくらいなのかを個別に判断しにくくなります。そもそも目標に準拠した評価であれば、目標に到達した生徒は全員100点でもよいはずです。「全員100点だと生徒が安心して勉強しなくなる」といった心配を抱くかもしれませんが、それは設定した目標が低すぎたということです。優秀な受検者を選抜するためのテストなのか、受検者一人ひとりの学習状況を評価するためのテストなのかによって、テストの作り方は変わります。

測るべきものが測れていないテストもあります。教科書の素材文をそのまま使って空所補充をさせるテストで測っているのは、学んだことを生かして思考する力でしょうか。空所補充問題を出してはいけないということではありませんが、測りたい力を測れているかどうかは確認すべきです。

問題形式の吟味も重要です。「選択式問題はまぐれあたりがあるから、記述式問題にすべき」と考える人もいますが、必ずしもそうとは限りません。記述式問題は問題数が少ないことから1問あたりの配点が高くなりがちで、選択式問題以上に、いわゆるヤマのあたり外れの影響が大きくなります。また、記述式問題の解答の採点は、採点者の主観によって、評価がぶれる可能性もあります。一方、選択式問題は1問あたりの解答時間が短いため、広い領域から多くの問題を出すことができ

テスト作成のための3つのツール

では、「よいテスト」は、どのような手順を踏めば作ることができるのか。ここでは、「テスト仕様書」「ブループリント」「テスト問題作成ガイドライン」の3つのツールを使った手順を説明します。

テスト仕様書は、どのような特性のテストを作成するかという具体的なイメージをまとめたものです (P.22 図3)。目的や対象者、測定する領域や

ます。そして、採点も客観的で正確です。どのような能力を測りたいのかを考え、選択式・記述式それぞれの強み (図2) を生かしたテスト作成が重要です。

資質・能力、さらに解答形式や問題数を考え、それらを記述します。

ブループリントは、テスト仕様書に基づいたテスト作成の前の青写真です (P.22 図4)。学習した内容を通じて育成を目指した資質・能力を偏りなく測定するためには、測定する観点ごとに

出題する単元や問題数を適切に調整することが必要です。

そのように、テストを作成する際には、テスト仕様書やブループリントの作成を通じた検討を重ねてから作問を開始します。何となく問題を作り始め、

図2 選択式問題と記述式問題の比較

選択式問題の強み

- 1問あたりの解答時間が比較的短い
- 多くの項目を出題できるため、広い領域をバランスよくカバーできる
- 多くの項目を出題できるため、合計点に対する1問あたりの影響が小さい
- 採点が客観的、公平に行える
- 採点が短時間で可能

記述式問題の強み

- 記述内容から多くの情報を得ることができる
- 解答のヒントとなる情報を与えにくい
- 当て推量で正解になることはまずない
- 思考過程が限定されない
- 記述力・表現力を評価できる

※石井教授の提供資料を基に編集部で作成。

途中で問題数や出題形式を調整してしまつと、出題者が作りやすい問題ばかりのテストになりかねないからです。

テスト仕様書やブループリントの作成の段階で複数の教師が確認することで、より精度の高いテストを作ることができます。若手の教師が作成したテスト仕様書などをベテランの教師がチェックすることで、「よいテスト」を作成する力を組織的に高めることができるでしょう。

とは言え、多忙な現場の先生方が、定期考査や単元テストを実施する度に、テスト仕様書やブループリントを作成するのは現実的ではないかもしれませぬ。そこで年に一度でもよいですから、経験豊かな教師とキャリアの浅い教師が、一緒にテスト仕様書やブループリントを作成し、検証してみてください。そうすることで、目的や測定する資質・能力、問題形式など、ブレがあつてはいけないテスト作成のポイントについての理解が深まり、その後のテストの質が変わってくるはずです。

テストによって 良問・悪問が変わる仕組み

テスト仕様書やブループリントが完成したら、いよいよ作問に入ります。

図3 テスト仕様書

項目	設定内容
テストの目的	1学期末の定期考査（総括的評価の材料とする）
対象者	高校3年生（「化学」履修者）
測定する領域	「化学」の授業で扱った以下の単元 「化学基礎」全範囲、物質の状態と平衡、物質の変化と平衡
測定する資質・能力	知識・技能：用語記述など 思考力・判断力・表現力：事象の説明など
解答形式	短答式、論述式
所要時間	50分
問題数	30問
実施方法	用具：紙筆式 形態：集団実施
必要機材	特になし
採点のルール	短答式問題は1問3～4点、正誤評価 論述式問題は1問4点、段階評価
結果の利用法	教師：総括的評価の材料にする 生徒：1学期の学習の振り返りに活用する
留意事項	ノート・教科書等の持ち込みは不可

※石井教授の提供資料を基に編集部で作成。

その際、テスト問題作成ガイドライン（P.23図5）の活用をお勧めします。

テスト仕様書やブループリントはテストの全体構成を定めるものですが、テスト問題作成ガイドラインは、ひとつひとつの問題が適切なものであるかどうかをチェックするための観点を一覧にしたものです。

テスト問題作成ガイドラインを見る際に注意していただきたいのは、示された指針や指標はすべて守らなければいけないものではないということです。テストの目的や測りたい資質・能力などを総合的に検討し、ガイドライ

ンで示されたどの項目を重視するかは、都度判断します。

例えば、大学入学共通テストでは、複数のテキストの中から必要な情報を素早く読み取ることを求める問題が出されています。そうした問題をテスト問題作成ガイドラインを基にチェックすると、該当の教科・科目の学力だけを測る問題であるとは必ずしも言えないかもしれません。しかし、情報を取捨選択する力など、様々な資質・能力をテストが測定しようとしているのであれば、そのような目的の問題としての意義を持つこととなります。また、

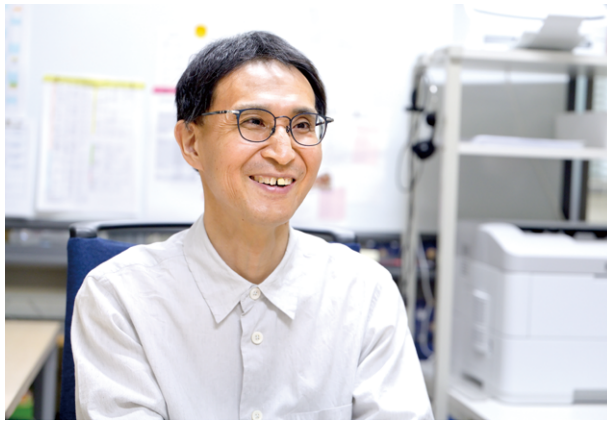
図4 ブループリント（テストの青写真）

項目	設定内容		小計
	知識・技能	思考・判断・表現	
「化学基礎」全範囲	12	2	14
物質の状態と平衡	6	2	8
物質の変化と平衡	6	2	8
小計	24	6	30

※石井教授の提供資料を基に編集部で作成。

大学進学を希望する生徒が多い学校では、現状の大学入試で出される問題の傾向を踏まえて校内テストの問題を作成することも多いと思います。

このことから、テスト問題作成ガイドラインで「logP（悪問）」としている問題をあえて作り、本来測ろうとしている教科・科目の力以外の力を測ることも現実には起こりえます。ただその際にも、「この問題で測ろうとしている力は何か」を見極めて、テスト結果を基に生徒に学習改善の助言を行ったり、自身の授業改善につなげたりすることが重要です。



**テストは生徒と教師をつなぐ
コミュニケーションツール**

テストでどのような問題を教師が出すか、そして生徒がそれにどう解答するかは、授業という時間をともにした教師と生徒との「学びのコミュニケーション」だと私は考えています。出題者である教師の意図が正しく受検者である生徒に伝わるのが、テスト中はもちろん、テストに至るまでの授業の場面においても重要です。

教師の意図が正しく伝わるテストを作成するために、テスト仕様書やブル

図5 テスト問題作成ガイドライン

問題の内容

- 問いたいことは何か、問題を解くために必要な能力は何かが明確であること
- 重要な事柄を問うこと。些末なことや一般的過ぎる問いにならないこと
- 正解が問題作成者の価値観に左右されるような問いにならないこと
- 特定の個人や集団に有利、または不利な内容にならないこと
- ひっかけ問題にならないこと
- 高次の能力を測る問題では、受検者にとって新奇な素材を用いること

問題の形式

- 測りたい能力に見合った問題形式を用いること
- 前の問題に対する解答が、後の問題の正誤に影響しないこと
- 「あてはまるものをすべて選べ」という設問は避けること。使う場合は部分点を与えること
- 読解力や思考力を測る記述式問題では字数制限を設けないこと

問題の記述

- 言語レベルを受検者集団に合わせること
- 教示文・本文・設問・選択枝(*)・図表などの記述量を必要最小限にすること
- 教示文・本文・設問・選択枝・図表などの文言をよく校正すること。ほかの人にも確認してもらうのが望ましい
- 教示文・本文・設問・選択枝・図表・解答欄などのレイアウトや大きさを適切にすること
- 特に低学年の児童に対して、選択枝は行を変えて1つずつ並べる
- 空所補充問題について、文意が分からなくなるほどの空所を設けないこと

設問部分

- 問いたいことは何か、どのような形式で解答したらよいかを明確・簡潔に書くこと
- 本文や選択枝などのほかの部分を読まなくても、設問部分だけで何を問われているかが分かること
- 否定表現を使わないこと。もし使う場合は、太字やアンダーラインで強調すること
- 一部の受検者にしか分からないような暗黙の前提を用いないこと

石井教授らが作成した「テスト問題作成ガイドライン」は、「問題の内容」「問題の形式」「問題の記述」「設問部分」のほかに、「選択枝」「記述式問題の採点」についてもチェック項目を設けている。石井教授の研究室のウェブサイトでは、すべてのチェック項目と問題の修正例(下図参照)が見られる。
https://www.educa.nagoya-u.ac.jp/~ishii-h/test_guideline.html



■ ガイドラインに基づく問題の修正例(「あてはまるものをすべて選べ」という問題を修正した例)

Bad	Good
<p>Q. 以下の選択枝の中から、金管楽器にあてはまるものをすべて選びなさい。</p> <p>A. トランペット B. フルート C. ホルン D. トロンボーン E. サックス</p> <p>正答: A、C、D (すべて合っている場合のみ得点を与える)</p>	<p>Q. 以下の各楽器について、金管楽器ならば○、金管楽器でなければ×をカッコ内に書きなさい。</p> <p>A. トランペット () B. フルート () C. ホルン () D. トロンボーン () E. サックス ()</p> <p>正答: ○、×、○、○、× (正解数と得点: 5(2点)、4、3(1点)、2、1、0(0点))</p>

Badの問題では、すべて選べているかどうかという精度の低い評価となり、受検者の能力を適切に反映しにくい。また、そのような問題形式は受検者を不安にさせ、受検者が能力を十分発揮できないという懸念もある。そこでGoodでは、各選択枝を二値評価する問題に修正することで、測定の精度を高めている。

* 石井教授の提供資料を基に編集部で作成。

プリント、テスト問題作成ガイドラインを活用していただきたいです。その際は、ぜひ校内の先生方とコミュニケーションを取りながら取り組んで

いただきたいと思います。例えば自分が作成した問題を、テストを実施する前にほかの先生に見てもらい、意見を聞いてみてください。作問に関するこ

とはもちろん、授業のあり方やテスト結果の評価の方法など、いろいろな点での気づきを得られるはずですよ。

* 本記事では、日本テスト学会の表記に従って「選択肢」を「選択枝」と表記している。

奈良県立橿原高校 普通科・3年生
松田昇太郎

奈良県立商業高校 会計科・3年生
北村桃佳



岩手県・私立専修大学北上高校 普通科・3年生
六串海遥

VIEW next 編集部 統括責任者
柏木 崇

私たちにとって「テスト」とは

テストが生徒と教師の「学びのコミュニケーションツール」であるならば、定期考査の廃止と単元テストの実施は、そのコミュニケーションのあり方によつてどのような影響を与えるのだろうか。単元ごとの評価に移行している3校の生徒が、定期考査のなかった高校生活を振り返りながら、卒業年次生として思う「テストの意義」について、VIEWnext 編集部統括責任者の柏木崇と語り合った。

最初は戸惑った単元テスト。次第に学習習慣が身についてきた

柏木 皆さんは、定期考査を廃止して単元テストを実施している高校でこれまで学んできました。3人とも中学校時代は定期考査があったそうですが、高校で定期考査がなくなったことで、日々の学習への取り組み方は変わりましたか。

北村 高校に入学して最初のうちは、単元ごとにテストが行われることに戸惑いました。でも中学校の時のように、定期考査の直前に一夜漬けで勉強するよりも、単元ごとに理解度を確認した方が、授業で学んだことが自分の力になっていると、次第に感じるようになりました。今は単元テストに合わせて毎日計画的に勉強しています。

松田 単元テストになったことで、テストの回数自体は多くなって、最初のうちは負担に感じたこともありましたが、でも徐々に慣れてきて、中学生の時よりも家庭学習の時間が少しずつ増えていきました。

六串 部活動で遅く帰宅した翌日に単元テストがあ

った時は、大変だと感じたこともありましたが、でも、単元テストは定期考査に比べて出題範囲が広くないことに着目し、隙間時間を有効活用しようと考えました。スマートフォンなどを使ってこまめに勉強したところ、単元テストは苦ではなくなりました。

柏木 単元テストのよいところを教えてください。

松田 テストの実施回数が多いので、1回のテストの結果が悪くても、2回目、3回目のテストで挽回ができるからです。

六串 私の高校では、同じ単元の単元テストに再チャレンジすることがあります(P.457参照)。例えば、単元テストの前日まで部活動に時間が取られてしまっても、その単元テストで納得のいく成績が取れなくても、再チャレンジして成績を更新することが出来ます。部活動も勉強も頑張りたい自分には、とても合っていると思います。

北村 定期考査のように、短期間にいろいろな教科科目を勉強しなくてよいところが、自分は勉強しやすくいいなと思っています。

柏木 反対に、単元テストについて「ここはちょっと

と……」と感じるところはありますか。

松田 単元テストに合わせた勉強の習慣がなかなかつかなくて戸惑った人はいます。先生にアドバイスをもらったり、友人と一緒に勉強したりして、早く慣れることが大事なのかなと思います。

六串 単元テストが1日に複数回ある時は、定期考査と同じように大変だと感じることもあります。

柏木 定期考査の方がよかった点はありませんか。

六串 中学生の時に、「定期考査で〇位以上だったらお小遣いをちょうだい」と母にお願いしたり、仲のよいクラスメートと競い合ったりしたのは楽しい思い出です。

北村 単元テストは自分との勝負で、定期考査は点数や順位を人と比べやすいテストだと思います。

テストは

夢や進路の実現を支えてくれるもの

柏木 3人とも学習習慣が身につけているようですが、それは単元テストのおかげですか。

六串 単元テストよりも、模擬試験が終わった後などに行われる先生との面談の方が影響は大きいです。個人帳票の具体的な数字を見ながら、「化学のこの単元は応用力が身につけていないね」などと先生に教えてもらうことで苦手な単元に気づき、該当の単元テストに再チャレンジして、苦手が克服できたかを確認しようという気持ちになります。

松田 先生の声かけは大きいと僕も思います。高校生になって少しずつ家庭学習の時間が増えていったのは、先生が折に触れて「疲れていても、10分、20

分でもいいから毎日勉強することが大事だよ」と声をかけ続けてくれたからだと思います。

北村 みんなで勉強する環境があることも大事だと思います。私の学校では放課後、友人と協力しながら簿記の勉強に取り組める環境を先生たちがつくってくれています。私の場合、勉強のやる気の一番の源は公認会計士になりたいという夢で、そのやる気を、友人と励まし合いながら維持しています。

柏木 定期考査が単元テストになればよいというわけではなく、勉強のやる気を高めるために大事なものはまた別にありそうですね。では、皆さんにとってテストとはどういう存在なのでしょう。

北村 私にとってテストは、夢の実現を支えてくれるものです。テストを受けた時点での自分の力を把握し、夢に近づいていることを実感できるようなテストであってほしいです。

松田 僕も単元テストや模擬試験で今の自分の力を知ることができています。でも、大学入試本番に向けて、不安も少しずつ大きくなってきています。

六串 大学入試のことは、私も不安です。だからこそ、学校のテストが自分の不安を少しでも解消してくれるものであったらいいと思います。「学校のテストでよい成績を取れたのだから、本番のテストもきっと大丈夫」と、自分の実力に自信を持って入試本番に臨むことができるのではないかと思います。

柏木 希望進路を実現するためのテストがあつて、その一番大切なテストに対する不安を、先生や友人とのかかわり、そして学校で受ける様々なテストを通して、少しでも軽減できたらいいですね。皆さん、進路実現に向けて、引き続き勉強、頑張ってください！

本特集を振り返って

定期考査の「存続」「廃止」の結論ありきではない議論を

本特集では、「定期考査は必要か」「その答えは、どのような点を考えれば出るのか」といった問いを立て、定期考査の見直しに関するデータや事例、テスト研究の専門家へのインタビュー、そして高校生との対話を通じて考えてまいりました。

後者の問いについては、「定期考査は何のために実施するのか」「その目的を果たすものになっているか」といった、自校の定期考査の目的の確認と現状の把握が答えの1つだと考えます。3つの事例でも、自校で育てたい生徒像や育成を目指す資質・能力の共通認識を図るところから議論は出発し、その目的を果たすための手段の1つとして、定期考査の廃止という結論に至っていました。自校の定期考査の目的や現状を考えることで出る、前者の問い「定期考査は必要か」の答えは、スクール・ポリシーや学校を取り巻く環境（教員数・生徒数、生徒の気質や学力の状況等）によって異なってくる、すなわち、「存続」「廃止」どちらの結論もあり得ると考えます。だからこそ、結論ありきではない、学習評価の本質に立ち返った議論を、校内で実施していただきたいと思っています。



VIEWnext 編集部
統括責任者
柏木 崇